

早稲田大学 社会科学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	全問マーク式
試験時間	60分(現代文1問、現古1問)
難易度	昨年並み

〔大問別講評〕

(一) 説明文。「『古事類苑』成立の経緯」について。

出典:熊田淳美『三大編纂物 群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史』。

《本文字数:約 3100 字＝昨年より約 400 字増加。設問数:9＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問一	易	【漢字】いずれも基本問題である。
問二	易	【空欄補充】いずれも前後の文脈から容易に判断できるものばかりである。
問三	易	【誤記訂正】第2段落の2行目「数多い」が誤記である。
問四	やや易	【内容理解】本文2～3行目から明らか。ただし、最終的に判断を下すには文章全体を読む必要がある。
問五	やや易	【理由説明】紛らわしい選択肢がない。容易に消去できるだろう。
問六	やや難	【傍線部理解】傍線部の内容は、西村の活動を説明した後の、最後の3段落で述べられている。そこで問題として何を取り上げられているかを読み取る。
問七	やや難	【傍線部理解】3は問題なく選べるだろう。1と2の判断が難しいが、明治六年に起こった2がきっかけとなって、「その後」1の内容が続いたことから判断する。
問八	やや易	【理由説明】最後から2段落目の内容から判断する。
問九	やや難	【内容合致】4は第2段落と最終段落から明らかに合致する。1は「外交に不可欠な」が誤り、2は最後の3行から誤り、とそれぞれ判断できる。

(二) 説明文(現古融合文)。「在満・宗武・真淵の歌論」について。出典:藤平春男『歌論の研究』。

《本文字数:約 3800 字＝昨年より約 1400 字増加。設問数:9＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問十	標準	【空欄補充】直前で引用されている古文の内容から判断する。
問十一	やや易	【文脈把握】空欄Cの1行後に「それ以降は……やや現実感の表出に還った」とある。
問十二	標準	【空欄補充】各空欄の直後の内容、及び、直前で引用されている古文との対応から判断する。
問十三	やや易	【文脈把握】直前の「それ」の指示内容から判断する。1は「人間性」が不適。
問十四	易	【空欄補充】直前の「こそ」の結びであること、及び、前2文の内容から判断する。
問十五	標準	【文脈把握】「宗武」の考えは38～56行目に書かれている。古文の部分もしっかり読まないと正解が分からない。
問十六	標準	【文脈把握】「宗武の主張と対立する」という設問の条件に注意。2は真淵の主張だが、宗武の主張と対立はしていないので不適。
問十七	やや難	【文脈把握】2は68～69行目、3は46・66～67行目の宗武の考えと一致する。
問十八	標準	【文脈把握】それほど紛らわしい選択肢はない。2は「同じ見解」が不適。

〔総合コメント・今後の指針〕

大問一、大問二ともに昨年並みの難易度であった。ただ、「あるだけ選べ」という設問が多かったため、選択肢の一つ一つを慎重に吟味していかなければならず、時間に追われた受験生が多かったかもしれない。

大問一は、『古事類苑』の成立の経緯についての説明文。とくに読みづらい部分はないので、スムーズに読めたであろう。ただし、設問は、問六、問七、問九あたりが難しい。他の設問を取りこぼさずに、この三問をどれだけ解けたかで勝負が決まるだろう。

大問二は、「在満・宗武・真淵の歌論」についての現古融合文。三人の歌論の説明が順に述べられているが、多くの受験生にとって親しみにくい内容なので、やや読みにくかったかもしれない。設問では、昨年と同様に、現代文と古文との対応をおさえて解く設問はあまりなく、純粋な現代文・古文の読解力が問われる設問が目立った。問十、問十四、問十五あたりは引用されている古文をかなり正確に読めていないと歯が立たない設問。現古融合文が出題されるからといって油断することなく、古文の学習をすすめてもらいたい。